有島武郎全集

第一卷

筑摩書房

有島武郎全集第一卷
昭和五十五年八月三十日　初版發行

著者　有島武郎
發行者　布川角左衛門
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番號　一〇一—九一
電話　〇三(291)七六五一(營業)
〇三(294)六七一一(編集)
振替　東京　六—四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所

0395-70901-4604　Printed in Japan

目次

探梅記……三
鯉　説……四
慶長武士……五
此孤墳……二
斬魔劍……一七
安徳天皇異聞……二九
根なし草……三三
歳暮の感……五〇
修養錄……五三
人生の歸趣……五四

リビングストン傳……六三
鎌倉幕府初代の農政……三二
札幌獨立教會……二九二
五日集……三一七
獨旅短信……三一七
草いきれ……三三六
露國革命黨の老女……三五五
かん〳〵虫……三六三
イブセン雜感……三七六
米國の田園生活……三八三
日記より……三九一
札幌獨立基督教會沿革……四〇九
ブランド……四一八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

遠友夜學校校歌……四七八
札幌農學校校歌……四八四
花語り……四八六
米國學生の生活……四八九
たとへばなし……四九二
秋　風……四九六
ド　ラ……五〇〇
北歐文學が與ふる教訓……五〇四
〔學習院改革に關する覺書〕……五一六
Development of Japanese Civilization……六一二
日本文明の發展〔譯〕……六一三
校　異……六七三
解　題……七〇三

初期文集

探梅記

時茲レ明治壬辰二月溫風蕭トシテ學庵ヲ拂フ、時ニ梅香紛トシテ佳香窓内ニ入ル、忽チ心ヲ決シ朋友數輩ト相携エテ杉田ニ遊ブ、抑モ杉田ノ地タル前ニ海ヲ望ミ後ニ山ヲ囘ラシ山麓ニ老梅ヲ植ユ、梅花爛々トシテ海ニ映ジ山ノ春氣ヲ帶ビ稍綠色ヲ帶ル所アルモ又一入ノ望ナリキ、鶯ハ清聲ヲ發シテ所々ニ囀ル、余等ハ横濱ヨリ徒歩シテ此地ニ至ル、時當ニ午刻卽チ食ヲ喫ス、夫ヨリ又足ヲ轉ジ根岸ニ遊ビ又再ビ杉田ニ歸ル、吟詩咏歌以暮日ヲ知ラズ、既ニシテ遠寺ノ鐘聲耳ヲ破リ歸烏ノ鳴容ニ目ヲ貫ク、卽チ大ニ驚キ忽チ歸飾ヲナシ以テ歸ラントス、梅花余ヲマネクガ如ク老松ノ聲我ヲ止ムルガ如シ、卽チ戀々歩進マズワズカニ此地ヲ遠カリ以テ家ニ歸ル、時ニ暮半寒風刺膚明月又寒シ、卽チ庵ニ歸リ燈下ニ此記ヲ作ル。

明治廿有五年三月中旬謹作此記

鯉說

鯉ノ獲ヘラレテ一旦俎上ニ上ルヤ肅トシテ動カズ以テ靜ニ死ヲ待ツモノヽ如シ」平宗盛源豫州ト壇浦ニ戰ヒ敗ルヽニ及ビ諸士是レニ死ヲ勸ムレドモ怯懦死セズ終ニ人ノ爲メニ海中ニ擠セラレ又泅シテ生キ以テ恥ヲ萬世ニ遺スニ至ル嗚呼宗盛ノ如キハ一鯉ニ劣ルノ者カ。

慶長武士

はしかき

慶長元和の物騒なる世を太刀一つ腕二つに見事切り拔けし不作法男少なからねど兵六が乙月三十一日の十二の鐘の鳴るをも覺ゑで書き連ねたる此男は別けて不作法されど其不作法が兵六にはしんそこかわゆくて堪らず讀む人兵六にさきがけせられしを悔くな思ひそと自分免許の鼻うごめかすは

由井か濱風に色まつしろき

兵　六

慶長武士

由井ヶ濱　兵　六

昨日、聚樂第(シュラクテイ)の華の夢は、詭くも今日(ケフ)破れて、明日(アス)は顯れ出でん修羅の街(チマタ)、人二人集れば噂せし治部殿、旗擧の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

事も、慶長の五年、九月の中には、終に關ヶ原の、蓬(ヨモギ)が中に見へて此に時ならぬ花一枝をそへぬ。

今日ぞ、徳川の流涸して、故太閤の御鴻恩報ひ奉り、豐臣の末万ゝ歳に傳へよと、勇める十三万餘騎の中にも、早りたる薩摩隼人、劍取ての名物男、關東勢なめげにも寄せ來たらば、毎夜うなる此腕に、生白首もぎ切つて、軍神の血祭せん、一刻も早く戰のあれかし、快や、足の置き處も忘るゝ計り猛り狂ひし士卒等の耳許に、万雷の落つるが如き砲聲、鯨起(トキ)。

煙の中に靡く旗幾流(イクスジ)、尾花も桔梗も紅に染みて、處々の紅葉に映らう様、焦熱地獄の焔とも見へつ可し、彼處にひゞく鯨起(トキ)の聲、此所にとゞろく砲の音、人馬の馳せちがう様織るが如し、此所死所と必死に働く島津勢の中に、大音聲にのゝしる聲を聞けば、「皆の者御聞きやれ、金吾殿反り忠召されて、味方、危ふうをぢやるぞ」。

＊　＊　＊　＊

「無念、口惜し、されど見よ、秀頼公十五歳の春を、此時に及びても家康奴猶太政を奉還せずば、主の意旨、今日の恥辱、見よ！　見事打晴し吳るわ、」紅(クル)に染みし槍を杖きて、重創(イタデ)に苦しみながら歩むもあり、齒の落ちし血刀携げて東の空睨むもあり、哀れ幸運は徳川に落ちて、此に敗北したる島津勢、人も疲れ、馬も疲れ、餓るも食無く、渴するも水無し、青葉紅葉打交りて、錦織る嶮崖の下道を、しどろに退き來たる、鼻先畑二三反を距りたる森のあなたに、見ゆるは黑く松の字を染めぬきたる旗、續ひて聞ゆる馬のあがき草摺(クサズリ)の音、維新公（島津家久）手綱しぼりて、豐久殿（家久ノ男中務太輔）を召され「見い又七、（豐久の幼名）あの旗印は福島が手と思ふは誤りか」豐久今年三十一歳、面は黑く、眉は濃く、眼は大にして鋭し、口の廻りには今日此頃すらざりし、虎鬚栗の如く、一見獅子をも挫く可くは見ゆれど、豐かなるほをには、得云はれぬ寛大の相あり、丈けは高しと云ふに非らねど、太く肥へたる腕には、千斤の金をも携げ可く、椀を伏せたる如き胸は、如何なる矢彈も貫き難かる可し、朱威しの鎧に、雲龍と名けたる傳來の三枚甲被り、三尺二寸の太刀はひて、梨地の鞍置たる葦毛の三

才駒に跨り、維新公の傍近く進みきつと森を見、更に口を開き、「父上の仰せ、某も確かに左衞門が手、勢は多くとも二千五百と見申す」。

松字旗ノ一勢、間近かに寄せてひづめを止む、中に陣頭に乘り出でたる武者、青馬に紫の房かけ、こん糸威しの鎧着て、鍬形打ちたる甲の忍ひ緒堅きは、二目ならで此軍の司、兩軍の物具にをぢて、狂ひ廻る馬靜めつゝ、きつと此方睨みし武者振り、敵ながらも、あはれ愛い男一貫！

餓へたれ、手負ひたれ、太刀取りて敵に會ふは、三度の飯よりも好物なる薩摩隼人、まひて眼前、見事匂ばしき肴出だされて、堪らん堪る可き、萬腔の鐵血全身に溢れて、武者震ひ一ツ、突けば音する、六尺の身体に籠る焔は口に迸りて、「ウ奴切れまくれッ」。

「中務殿手と見申したは見紛れか、副島左衞門が息、刑部少輔正之、見參せん、」言ノ下より維新公大音に、「掛れッ」勇氣天ヲ突ひて、待構へたる兵士等、潮の如く襲ひ掛れば、其心得せし副島勢の一聲に打ち出す硝煙の下に、あはれや島津勢をり重つて斃る、之れを見てさすがにためらうを、維新公わざとならぬ怒色に顯はれて「きたなし何事ぞ進め」。

馬乘り出して、自ら敵に向はんとする袖を、握りて動かせじとするは、豐久なり、「又七、何事ぞ、今に及びて命惜まぬは、放せ、放さぬか」豐久尙も放たで、敵軍を睨めて切齒する維新公を見つめて、烈しく、「父上」何事ぞとふりむく父を、つら〳〵眺めて聲も曇りぬ、「老ひ給ひし父上、今此所にあたら、イ、犬死して、……家康奴の居るを、忘れ給ひてかッ」家康と聞きて、稍首傾けたる維新公、纔に開く口は、「さらばとて、又七、……其口たゝくは、未だ吾が活き道ばし、有ると思ふて云ふか、聞かう、」「あれ程のうぢ虫、又七苦もなう、堰き止め申す可きに、其暇に此道を、」維新公高く笑ふて、「又七を殘いて、此翁獨、逃るゝとは、神以て夢さら〳〵、」親の恩！　嗚呼思へば深し、豐久默然として首を垂れ、兩眼に滴る涙を纔にをさへて、「ヲ、思ふても見給へ、きたなう、私情に迷ふて、ヤ、ヤ、山よりも高き、君恩を」堰き來る涙に、聲もつゞかず、維新公も思に

沈みて、あはれや嵐に散らん老木に置く、露一雫、耳かすむる、銃丸に見回へれば、氣のみ早りし島津勢も、憂し身体には得勝たで、直に立ちし旗も、何となう、倒るゝが多し。

豐久維新公の傍に進みより、茫然たる維新公の、馬の目を白布に結び、道の後に向けて、「チ、チ、父上、サラバッ」馬の臀に、太刀風寒く二度迄切り付くれば、馬、目は見へず、臀ノ痛にたゑ得で、さらでもの逸物、早、道のあなたに一目散、維新公馬上に止めんと、すれど、返さんと、すれど、既に術なし、豐久之れを見て、鞍つぼにうづくまり、「父上ッ」纔に漏せし悲聲は、あはれ幾万酔の感慨や籠るらん、起き上りも得せで、兩眼を傳ふ熱涙は、瀧の如く、水に練り、火に錬へし、鐵衣も之にはなどて、解けでやは、傍へに茂れる枯尾花も、首うなだれて一雫、あはれ男と呼びたげなり。

漸く首もたげたる豐久、傍の心知れる雑兵に向ひて、「者共、今より父上の跡逐へ、かまへて、又歸り來給はぬ様、なせ、心得よ、いざ」かしこまりぬと馳せ出づる、一群の兵を呼び止めて、「必ず父上に、病ばし、シ給はぬ様云へ、又、又七敵の多ければ、永き訣れやも知らぬ、と申せ……いや云ふな、さではなかりし、マ、又七、見事勝鯨起擧グベキニ、暫シ待ち給へと、タ、タ、確かに、云へッ、」杜鵑、血に啼くとは聞けど、などて之には。

此間にも、敵せまりぬ、我勢危し、なんど、報知來るに、目もくれざりし豐久、今漸く雑兵を出しやりて、愁然として、たゝづめる所に、息もつかせず馳せ來りし、騎武者、馬前に馬止めて一禮し、「物申す無念ながら、我軍敵を逐ひ行きしが、幸無く、伏兵に遇ふて、惣勢崩れ申したッ、」云ひ終つて初めて一息。

豐久眼を閉ぢて落ち來る涙ふり振ひ、纔にもらせし笑は、早舊の豐久ナリ、士卒等も先の言葉に、大將の決死も知れたり、所詮生きても、戰なければ、用なき身体一貫、「儘よッ」命を無き物にして、我から投げ出したる體には、岩をも征矢通す可し、乾坤も覆らでやは、豐久之れを見てよろこばしげに、又笑ひぬ。

進み出でたる島津勢百騎、勇氣、天に漲り、地に溢れ、眉廂の陰に見ゆる壯士の眼に、殺氣滿々テ、人ヲ射リ

ヌ。

あなどり難しとや思ひけん、必死の槍ぶすまをや恐ぢけん、副島勢もひかゆ、万籟静まつて、唯聞くものは、ふむわらじと、馬のあがき、武者震の音、「ザック」。

＊　＊　＊　＊

上に靡くは硝煙か、下にむらがるは土煙か？　朦朧として天日暗し、「命の捨て處ぞ、男は死ねやッ」、死を競ふ島津勢百騎、もらさじと爭ふ、副島勢二千、彈飛び血煙立ち、差ちがへ、ふみにじり、屍の山、血の河、物ともせぬ武夫が、たけび！　豐久身に受けたる矢十餘、あけに染みし血刀さげて、あたり見廻せし物凄さ、豐久の先に、煙の中を切りまくるは、確かに副島正之、豐久につこと笑みて進み寄り、「正之ッ、我こそ豐久、不足なき敵ぞ、出會へ、」正之聞きて「應」答へつゝ太刀あわせぬ。

二騎が中に入りしは何者？　桃實甲、大荒目、鐵の棒持ちたる大兵なり、正之を後にかばひて、「今じや、イ、今の中じや、早う其所、退き給へ、副島内記後承つた」。

豐久、逃れんとする正之が、勁條を弓手につかみ、内記がうち來る鐵の棒を、見事伏して過しつ、切り入らんとすれば、内記もさるもの、見事、身を引きすざつて、又も打ち來る手鍊、正之も今は必死、太刀引き廻して、後拂へば、あはれ、パッと散る血ふゞきと共に、豐久が腕は二となりぬ、「奴、ヒ、ヒ、皐怯ゾ、マ、マ、正之、マテッ、」されど正之、何處へ行きしか、煙の中に影だになし、豐久今は早詮なし、馬上ながら、右手に内記が帶取つて、宙に差上げたるは、惡鬼か、魔神か。

二度三度打振りて、内記を力籠めて、動と地に擲てば、無殘、叫び聲と共に、眼流り出でゝ、口より溢るゝ血潮、快よげに打見やりて、呵々と笑ひ大音聲に、「敵も、味方も、豐久が死樣覺へ置きて、後の覺悟ともせよッ、」云ひつゝ馬に跨りしまゝ、短刀拔き持ちて、喉にグザ、迸り出づる、鮮血は朱威しを染めて、一しほの、あでやか

さ、拔きし短刀を後に廻すや、滿身に籠れる力と共に、首は前に落ちて、骸(ムクロ)は後に倒れぬ。

明治の御世に遇ひし民草の、かまどの烟、遙かにたなびきて、關ヶ原にも霞と思はるれど、笑止、古硝煙の朦朧たりしは何處？　時たがへず、降る雨毎に、森の紅葉は、にほひ濃かなれども、をぞや、昔血の雨降らせしは那邊？　行きても忍べ、豐久憐れと思す風流男(ミヤビ)、轡虫の音、親こほろぎの聲、嗚呼、轉だ斷腸！　（終り）

明治廿七年十二月三十一日脱稿

此孤墳

小序

余かつて暑を避けて鎌倉にあり、偶ゝ高時以下戰死の墓を吊ふ、一洞の中草茫ゝたるの間纔に一墳を得、人の問ふなく又語るなし、草民亦彼の罪惡を知りて此に至る、然り高時の罪や恕す可らずと雖も其丞の事情已むを得ず、是れに與し今奠を得ざる者に思ひ至れば感慨何ぞやまんや、之れ余の此篇を草する所以、地下の士聊か余の心情を汲むあらば幸福何ぞ堪へんや。

明治乙未五月五日　　勁隼生

再白次の畫中の孤墳は余の至りし時實寫せしもの、又傍の武士は當時鎌倉武士の憤闘を想像せしもの、二つながら拙劣見るに堪へずと雖も纔に拙文を補ふを得ば幸甚。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com